『世界文化』と『土曜日』

――『世界文化』研究(一)――

平林一

(1)

一九三五年(昭和一〇)から一九三七年の日本におけるいわゆる人民戦線のたたかいは、現実的にはなんらのみるべき成果をのこさずにおわったけれども、天皇制ファッショの反動攻勢は、思想・文化の面にもっとも強くあらわれてきた。司法省刑事局『思想研究資料(特輯第七七号)』(昭和一五年六月)は、「人民戦線と文化運動」をまとめているが、その「はしがき」で当時の京都地方裁判所検事下川巌はつぎのように書いている。

〈我国に於ては、未だ、政治、経済、文化等各分野に亙る広汎なる人民戦線は結成せられず、纔かに政治、経済の分野に於て日本無産党を中心とする政治戦線統一運動、社会大衆党を中心とする労働運動戦線の統一等が試みられたに過ぎず、又文化分野では恐らく最近京都に於て行はれた稍々形態を整へ始めた運動があるに過ぎないと思はれる。〉

この検察側からつくり出された日本における人民戦線運動期を時代背景にして、京都に開花した「暗い花ざかり」のなかの共産主義思想に生きた大学生たちの急進的な姿をえがきだした小説に、野間宏の「暗い絵」がある。

〈あの黒い暗いブリューゲルの穴のような魂、あの穴のような人々の魂を救う泥まみれのブリューゲルのキリスト、そし

(1) 第四十四號 (昭和十一年九月十日第三種郵便物認可) 昭和十二年十一月五日

生活に対する勇気
精神の明晰　隠てなき愛

土曜日

憩ひと想ひの午后

編輯・發行兼印刷人 男克勢 3セン

九國會議の開催
搖ぐ象牙の塔
自發的

民族の心はこの現實の中にのみある。

土曜日

世界文化

昭和十年十二月

創刊號

歴史の問題・それに對する二つの方法……馬場啓之助 1
時代の子と孫子
—スピノザの歴史的論—……シエストフ 64
明治演劇史研究の方法論……辻部政太郎 19
認識法的美學とマルクス……リフシツツ 50
世界文化情報
戦後英國小説界の動向……奥村 34
フランス文壇と全ヨッパ作家大會……岡田 93
メフセーグ……ジイド 45
ツヴヤート文化ニュース……相澤 46
第三帝國への機構状その他……水野 57
新刊紹介……73

京都・世界文化社

『土曜日』をめぐっての座談会
（一九六六年一月二十三日　京都・紫明荘）

向って左から住谷悦治氏・能勢克男氏・斎藤雷太郎氏・和田洋一氏

てまた現代のキリスト達、木山省五は俺から去って行く。……そう、彼は決行するだろう。そして直ぐに逮捕されるだろう。ただ旗を掲げ、旗の位置を示すだけで。そう、それは決して成功しやしない。そして木山はそのことをよく知っている。それを知りながら俺の許を去って行く。永杉や羽山の許へ行くために。あの偉大な自己、偉大な仕事、偉大な学問の確立の野心に充ちた、そして苦しみに貫かれながら将来をめざして一歩一歩進んでいた木山省五が、俺から去って行く。〈

これは小説「暗い絵」のおわり近くにある文章であるが、「（日本共産党の）旗を掲げ、旗の位置を示すだけ」の絶望的な抵抗へみずから踏みこんでいく木山省五に、まさしく、その英雄主義とストイシズムと玉砕主義とにおいて、戦前日本インテリゲンチャの急進的な姿をみることができよう。人民戦線期において、その抵抗が絶望的になるのはまた必然の出来事であった。一九三三年の京大滝川事件は自由主義思想にたいする国家主義の側からの弾圧ののろしであった。つづいて美濃部事件・河合事件というような権力の側からの自由主義に対する弾圧があいつぎ、「国体明徴」、「国民精神作興」のスローガンのもとに大陸侵略の政策が着々とすすめられていた時期なのである。すでにして合法的な日本共産党は壊滅しており、天皇制ファシズム下における官憲と軍部は、共産主義・自由主義・キリスト教主義などの根を絶とうと必死に努力していた時期なのである。彼らはどんな小さなグループでも見落そうとはしなかった。彼らの手によって、日本の島々が一種の強制収容所になろうとしていた時期であり、日本の急進的知識人が絶望的にならざるをえない状況なのであった。

そしてこの人民戦線期において、さきの下川検事の記述にもあるように、京都では『世界文化』、『土曜日』、『リアル』、『学生評論』、『同志社派』などの進歩的な文化運動の機関誌・新聞が一せいに咲きそろっていたのである。

筆者は本誌第九号において『美・批評』集団の成立と展開を追及したが、この稿においては、第九号の続稿として『世界文化』および『土曜日』の性格・運動について考察をくわえたい。その際、さきにあげた司法省刑事局『思想研究資料』（「人民戦線と文化運動」）を対極に見つつ、今日までの調査を活用し、その記事を検討吟味してゆきたいと思う。

（2）

『世界文化』が創刊されたのは一九三五年（昭和一〇）二月のことであり、一九三七年一〇月通巻三四号で終刊になった。『美・批評』が終刊になったのは、一九三四年一〇月である。『美・批評』から『世界文化』への移行過程を『思想研究資料』は、つぎのように記述している。

〈雑誌「世界文化」を中心として人民戦線的文化運動を展開した「美批評研究会」は昭和九年一月結成されたのであるが、其以前に雑誌「美批評」が存在する。之が昭和八年六月廃刊となり、同九年一月再刊するに際し、「美批評研究会」なる研究団体が成立した。再刊前の「美批評」は元来純学術雑誌であってヒューマニズム又は共産主義同情者達がやってゐたが左翼的色彩は余りなかった。然るに「美批評研究会」成立に際し新にメムバーに加った真下信一、久野收、島津勤、新村猛、森本文雄、和田洋一、禰津正志等は皆共産主義者であったから研究会は漸次左翼的色彩濃厚となり同年五月再刊せられた「美批評」にも漸次其の傾向が表はれた。そこで同年十月末頃よりメムバー間に左翼的傾向強きもの（新メムバー）と然らざるもの（旧メムバー）との新旧二派を生じ、遂に旧派の一部が脱退し左翼的分子のみにて雑誌改題を計画同年一月「世界文化」を発刊するに至った。再刊「美批評」当時より漸次左翼的色彩を加へ来りたる此の雑誌は「世界文化」として改題創刊せらるるや一層其の傾向を増大し、文化人、知識人への文化啓蒙的任務を果し来ったが、新村猛が同誌上にフランス人民戦線運動情報を報道するに及び、其の内容はフランス、スペイン等の反ファッショ人民戦線運動の状況を報道するに主力を注ぎ著しく人民戦線的となったのである。〉（九七―九八ページ）

さきにも述べたように、一九三三年（昭和八）の京大滝川事件は、自由主義思想に対する国家主義の側からの弾圧ののろしであり、つづいて美濃部事件（昭和一〇）、河合事件（昭和一三）というように、自由主義に対する迫害が行われ、国内におい

ては天皇制ファシズムが勢力を得ていったのである。第二次『美・批評』の人々は、イデオロギーの如何を問わず、世界の政治情勢、文化運動の動向をできるだけ正確に知ろうとしていたので、ヨーロッパにおける反戦反ファシズムの運動には強い刺激をうけたのである。藤田貞次や辻部政太郎が回想しているように、[1] 一九三四年から三五年にかけての歴史時点において、『美・批評』は単なる美学プロパーの同人誌から進歩的な思想・文化の雑誌に変貌せざるをえない運命にあったのである。あくまで美学雑誌の表志を貫ぬこうとする意見と、進歩的な思想・文化雑誌に切りかえようとする意見とが嚙み合い、幾度かの討議ののちに、遂に後者の性格に切りかえられたのである。しかし、『美・批評』から『世界文化』に移行しても変らぬ第一の目標は、「学問的良心を守り、各専門部門で具体的に一歩でも学問的に問題を前進させることに努力するということ」であり、「あまりに党派的（パルタイリッヒ）に偏することは、慎しむことも暗黙のうちに諒解されていた」ようである。

ここで『思想研究資料』のさきに引用した記事の検討にうつるのだが、第二次『美・批評』に新たに加ったメンバー、いわば新派といえる真下信一・久野收・栗本（島津）勤・新村猛・森本文雄・和田洋一・禰津正志らを、すべて共産主義者と規定するのは誤りであろう。勿論、共産主義者という言葉の定義が問題であろうが、すべての新派がそれぞれ政治的背景をもち、政治運動をしていたわけではないのである。和田洋一もこれを裏がきするように、つぎのように記している。

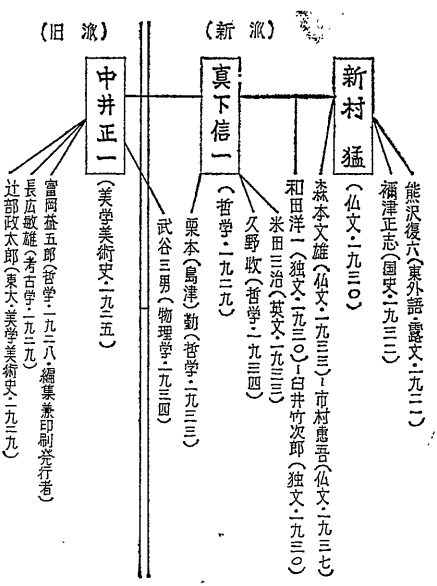
〈『世界文化』の重要な特長の一つは、人民戦線内閣の成立したフランスにおいて、知識人、芸術家がファシズムに抗してはなばなしい活動をしている姿を、日本の読者に伝えたという点、当時の日本のジャーナリズムがサボッていたことを進んでやったという点、単にフランスの事情を伝えるだけではなく、自分自身もフランスの知識人、芸術家にならって反ファシズムの運動を推し進めようとした点であろう。

コミンテルン第七回大会で書記長デイミトロフがどんな演説をしたかということを、可成りはっきり知っていた者が『世

界文化』の同人の中に二、三名いたかどうか、あるいは一人もいなかったのか、よくは分らない。ともかくも『世界文化』は、フランスないしヨーロッパの知識人の反ファッショ的行動に刺げきされ、はげまされた運動であって、コミンテルンの方針にそおうとした運動ではなかった。〈(『灰色のユーモア』理論社・一九五八年一一月・一七九ページ)

和田のこの文章を読んだ平野謙は、「これは非マルクス主義者の立場から回想した言葉であって、逆にいえば、デイミトロフの演説の方針にそおうとした同人の存在を否定するものではない」[2]と書いているが、政治的背景をもっていた『世界文化』の同人はごく少数の人であったと、現在の筆者には推察される。和田が『灰色のユーモア』の巻末であげている同人名によって関連図表をつくってみると図表Ⅰのようになる。和田が同人と呼んでいるのは、当時同人費をはらい、会合などの常連であった人たちをさす。(　)内は専攻学科と京大卒業年であり、京大以外の卒業者は学校名を記した。線は交友を通

図表Ⅰ



して の『世界文化』集結の予想経路を示したものである。図表Ⅰに示した人たち以外に、なお同人数をふやしている人もいる。たとえば、久野収などは、能勢克男・原光雄・近藤洋逸・加古祐二郎・淵定・梯明秀・緒方勇雄・青山秀夫・加藤正などを同人としてあげている。

図表Ⅰをつくるには、新村猛のつぎのような回想も大切なより所となった。

〈こうした例会(『美・批評』—平林)を二月から秋まで六回か七回繰返すうちに、同人たちの大多数はだんだん欧米の情勢に関心を向けるようになり、バルビュスの『ゾラ』の書評をのせるか削

るかという問題がきっかけになって、新聞紙法にひっかからない定期刊行物にすると同時に、『美・批評』という表題を改めよう、という提案を真下・久野両君と私など新派の者が持出した。それは確か十月（一九三四年→平林）だったと思う。

月評会の席では真下君が新派を理論的に領導する状態に変りはなかったが、フランスの人民戦線が昂揚してゆくにつれて、執筆と編集の仕事では私がいつとはなく新派の先頭に立つようになった。旧派の方では、理論と人柄との両面で中井さんが頭領格だったことはいうまでもない。

その中井さんが『美・批評』の改組・改題に難色を示されたのである。それには、理論あるいは思想の面で少なからぬ抵抗を感じられたこともあり、朝日新聞大阪本社に勤務されていた美学の藤田貞次さんの仲介で或篤志家からもらっていた雑誌発行費の助成金を断わりたくないという顧慮も働いていたようである。(3)〈（傍線→平林）

右の文章にある「旧派」というのは、第一次『美・批評』からひきつづいて第二次『美・批評』からひきつづいて第二次『美・批評』に参加した人々であり、「新派」というのは、第二次『美・批評』から新しく同人になった人たちである。中井と真下と新村に□をしたのも、右の引用からであり、本誌第九号（九〇―九一ページ）に筆者が記したように、真下は京大関係者と同志社関係者のくさびのような役割をもはたすのである。

現在の筆者にとって、和田のあげた同人中で、その政治的背景をもっているように考えられるのは、禰津正志一人である。これは訂正されなければならないかもしれないが、禰津正志についてこのことを少し考えてみよう。

禰津の一年先輩の京大史学科国史学専攻を卒業した人に清水三男がいる。和田洋一はやはり『灰色のユーモア』のなかで、清水についてつぎのようなことを書いている。

〈それは彼（清水→平林）が、新村猛君や臼井竹次郎君、その他二、三の『世界文化』の同人と親しい関係にあったにもかかわらず、仲間入りしなかったこと、依頼をうけて論文一篇を寄稿したが、合評会その他に一度も姿をみせなかったこと、

そればかりか、彼が『世界文化』の運動をあきたらなく思い、非合法の面にクビを突っこんでいたらしいからである。〈（一七三―四ページ）

〈清水三男は当初『世界文化』を軽蔑し、その運動をインテリゲンチャの自慰的行為にすぎないとみていたが、のちにコミンテルン第七回大会の決定を知るにおよんで『世界文化』にある程度理解をもつにいたった、と彼の一友人は語っているが、はたしてその通りだったのかどうか、今日たしかめることは困難である。〉（一七五ページ）

その清水について、『思想研究資料』の文化運動関係起訴者一覧表は、その犯罪事実の一部として、

A　党活動資金

1　資金ノ提供

四回ニ亙リ約四十七円

2　資金徴收　・

三浦信夫ヨリ約六円

B　党文書ノ配布

赤旗其ノ他党文書約四〇部ヲ田井啓吾、三浦信夫ニ交付

などをあげている。同じく犯罪事実の一部として禰津にはつぎの記事がある。

A　党活動資金提供

昭和七、六――昭和九、四

清水三男、田井啓吾、岡田桑三ト順次連絡シ赤旗第二無新等ノ配布ヲ受ケ同人等ニ対シ合計約二十四円ヲ提供ス

文化運動関係起訴者一覧表には、『世界文化』関係として、他に久野收・真下信一・新村猛・和田洋一・中井正一・熊沢

復六などが名をつらねているが、その人たちの犯罪事実のなかには党活動資金関係の記事はない。

一九三三年（昭和八）夏、禰津正志はフランスから帰国した。彼はフランス共産党の動向を目撃してきた新知識であった。新村猛らが文献上で得たものを、彼は肌で感じてきたのである。その禰津を新村に紹介したのが田井啓吾であり、三三年の九月から禰津と新村の交渉は生じたのである。

清水、禰津、田井はともに京大史学科（国史学専攻）の卒業生であり、卒業年は清水が一九三〇年（昭和六）、禰津が一九三一年、田井が一九三二年となっている。清水と田井はすでに故人であるが、右のいささかな解説からも、清水・禰津・田井が当時の非合法活動の内部、あるいはその周辺にいたことはたしかなようである。禰津の証言によると、田井啓吾は、青年共産同盟の京都の責任者であった。だから、日本共産党と『世界文化』とのあいだに関連があるとしたならば、禰津正志が先ず問題の人としてとりあげられなければならないだろう。そして『世界文化』の方から考えて、その周辺にいた清水三男、田井啓五・梯明秀などが考察の対象になってくる。

ともかく、当時の検察当局は、『世界文化』同人の思想をすべて共産主義思想に結びつけようとしているが、京都における人民戦線運動をでっちあげて、『世界文化』の同人を検挙し、やがては京都大学の天野貞佑・田辺元ら、また、末川博や滝川幸辰らまでその累をおよぼそうとしたのである。そうすることによって、京都の検察当局の人々は功績をあげることができたからである。

（3）

平野謙は昭和文学の特徴を明治・大正の文学と比較しながら次の三点に要約している。それは三派鼎立、世界的同時性、人間性の解体という三点である。そのうち、世界同時性についての解明のなかにつぎのような文章がある。

〈そこには、二葉亭四迷や自然主義文学の場合のような大きな時間的なズレはもはやみられない。これはともあれ日本文学が世界文学の一翼として、世界の悩みを共通に悩みだしたことを意味していよう。かつて島村抱月は「破戒」を評して「ヴェルト・シュメルツ」という言葉を用いたが、ここにいたってはじめて現代文学は共通の世界苦に直面したのである。[4]〉

日本および西欧の知識人たちが、迫りくる第二次世界大戦の危機にさらされながら、その苦悩を深めていったのは、一九三〇年代のことである。世界の思想史の上でも、日本の思想史の上でも、この一九三〇年代という時代は、非常に興味ある重要な意味をになっており、われわれは、この時代を、研究上の本格的主題として今後とりあっかってゆかなくてはならない。

J・P・サルトルは、「一九四七年における作家の状況」のなかで、一九三〇年ごろのフランスにおける文学的神話と歴史的現実との喰違い（ズレ）のめだちを述べ、「この喰違いは、われわれが、一九三〇年以来、自分らが最初に本を出す前に、十分感じていたものである。大部分のフランス人が自分らの歴史性を発見して茫然自失したのは、この時代である。……（中略）……一九三〇年以後、世界的不況、ナチスムの到来、シナ事変、スペイン戦争が、われわれの眼を開いた。大地がわれわれの足元からくずれてゆくように思われた。そして突如として、われわれにとってもまた大手品がはじまった。世界大平和の最初の年月をば、俄かに二つの大戦のあいだの最后の年月として見詰めなければならなかった。[5]」とかいている。

ヨーロッパ知識人の主体が、歴史性ないし歴史的現実との出あいにおいて、位置づけられている自分を発見しなければならなかったのである。この「位置づけられた自己」の認識というものこそ、日本および西欧における一九三〇年代以降の知識人論の重要なメルクマールになる。いわばそのことは、歴史的現実への洞察の正否・深浅にかかわりあいをもつからである。[6]

それならば、一九三五年（昭和一〇）二月に創刊された『世界文化』の人々は、自らをどのように位置づけられたものと知

覚・認識したのであろうか。同人たちが共同討議の後、真下信一が記述したところの「創刊のことば」にそれをさぐってみよう。

〈歴史に於ける一つの歴史的な時代として此の時代を特徴づけるのは、確かに当っている。これまでの時代の何とか解釈のつけ得られた、あり来りのテムポが、破られて、乱れて、所謂『非常時』—危機—なのである。ふとふりかえって見て、自分の立っている舞台に気がついた時、ひたすら今まで努めていた自分の努力が、これでいいのか、それともいけないのか、疑われて来る。時代のテムポがすっかり変っていて、自分がそれについて行けるか、行けないか、に迷う。不安。今までのものが無意味に見える。ニヒリズム。正に此の様な不安とニヒリズムとに、此の時代のインテリゲンッィアの敏感な部分が今、立っている。学問文化への不信頼と絶望。だが、まじめな頭と胸とは、到底此の様な不安と絶望には堪えられない。新しい、しっかりした、もう再びは背かれることを知らない文化の、大通りを探し求めざるを得ない。その様な世界文化の大通りこそは、ただまじめに努力する人々にのみ踏まれるであろう。努力すると云うことは、動いていると云うことだからである。だから、この雑誌も、出来上った、一定の場所に落ついている人々のものではなくて、たえず、本当のもの、正しいものを求めつつ、動いている人々の友である。真理の扉を、たたくことを忘れないでいる真摯な手によってのみ、この雑誌は育てられるのであろう。〉

『世界文化』の人々は、一九三五年の日本の歴史的現実を「非常時」として把握した。それは彼らにとって学問・文化の危機としてとらえられている。「これまでの時代の何とか解釈のつけ得られた、あり来りのテムポが、破られて、乱れて」という言葉は重要である。天皇制ファシズムが擡頭する以前と以後では、状況がすっかり変ってきたのであり、彼らは解釈のつけられない状況に直面したことになる。日本の歴史的現実は否応なく彼らに迫り、それまでの彼らの知性では処理できない時代がやってきたということである。それゆえ、彼らの眼前にある学問や文化に対して、彼らは不信頼と絶望をもち、

新しい、しっかりした文化の大通りを深し求めざるをえなかったのである。

『世界文化』の人々が「非常時」ないし「危機の時代」と感じた時代は、いわゆる「暗い谷間」の時代なのである。同人の一人和田洋一は、自らの実感を通して、「底知れぬ深い谷間へずるずるとすべり落ちてゆく時代」、「破局への一方的傾斜の時代」、「奈落の底への地すべりの時代」だったと告白している。[7] そんな時代なのであるから、自由な学問・文化にとっては悪しき時代であった。彼らが眼前に見る国家主義的な学問・文化に対しては不信頼と絶望をもち、学問・文化の本道を見つけるために、既成との格闘を通して、自らの理論を構築せざるをえなかったのである。しかしながら、真正面きった外部との格闘を表明する論理をそのまま発表するのは、はばかられた時代である。彼らはどういう方法をとったであろうか。

〈世界文化の情報と、其の文化に多少とも貢献する理論の翻訳とを成るべく多く載せて行きたい。〉（創刊号・編集後記）

〈必要なのは主観的決意だけではない、世界と共にこの自分をも客体として冷静に認識評価することがそれにもまして必要ではないか。そしてこの認識評価の道にこそ普通の意味での、出来合の公式は存在しないのではなかろうか？　情勢がもっと急迫すれば、インテリゲンチャはもっと差し逼った気持でシェストフに縋るかも知れない。そういう意味でシェストフはもっと論議の対象にならねばならないと思う。編輯者がくどくど書き立てたのはジャーナリズムが余りに景気良く動くことによって、問題を究明せずに、同一場所で足踏みをしたり、後戻りをしたりするのを嘆いてのことである。……来月号は愈々本誌が現在持っている全能力を傾注した『現代フランス文化』特輯です。いろいろな意味で問題を孕んでいるフランス、ドイツが国際文化の一角から退場してから、我国の人々に頓に見直され始めたフランス、その文化全領域の現状に対する快適な案内書を作る意気込みで、プランは着々進んでいます。〉（五号・編集後記）

右に引用した編集後記からもわかるように、出来あいの公式的理論でなく創造的理論の確立とともに、それを裏づけるような世界文化の報道ということが、彼らの意図したものであった。そして、時代との連関において、後者に多くのエネルギ

ーをさいたわけである。中心には中井正一と新村猛がいたわけであるが、右のような性格からして、主導性はだんだん新村の方へ移行していった。とくに、一九三六年（昭和一一）七月、斎藤雷太郎がやっていた『京都スタヂオ通信』を改題し、『世界文化』同人たちとの協力のもとで『土曜日』を発刊しはじめた頃から、新村の主導性はますます明確になっていったようである。

「美・批評に就て」（『美・批評』第三二号おりこみ）には、「此の雑誌は、毅然として自らを、本当のアカデミズムに、本当のジャーナリズムに鍛へ上げねばならない。」という言葉があった。その精神は『世界文化』にもうけつがれて、天皇制ファシズムの思想、文化面にあらわれてきた反動攻勢に対して、『世界文化』は一つの抵抗主体たりえたと思う。

『世界文化』の記事は、大体、論説と世界文化情報を根幹とし、それに新刊批評及び映画・文芸・音楽・演劇・科学の紹介批評が付加されている。ここに集った同人たちは、実存主義や西田哲学や日本浪曼派の皮相な流行には反撥を示したが、反ファシズムという一点においてはさまざまの立場を包含できたのである。『世界文化』においては、反戦反ファシズムということが統一の核をなし、イデオロギーとしては多面性を発揮しているのである。『世界文化』におけるヒューマニズム、ナショナリズム、コスモポリチズム、プラグマチズムなどは重要な側面なのである。イデオロギーの広い統一戦線的立場による『世界文化』の編集方針は、第三〇号（昭和一二年六月）でも明かに確認されている。その編集後記にはつぎのように記されている。

〈いささか遅蒔の嫌いはあるものの本誌編輯の建前に就いて一言述べるならば（ママ）、本誌は学問の分野で解決できる問題を政治の分野に移して解決する事をなるべく避けたいと思っている。この建前は多少の誤解を招くかも知れないが、強いて弁解するまでもなく、達識の士は恐らく是とせられるであろう。そしてまた、本誌に今まで掲載されて来た論文や評論は必ずしも一定の立場から書かれてはいないし、或る範囲内ではもっと様々の色合をもつ立場から書かれたものを掲載したいのが念

願であって、その点編輯部の意図よりはずっと狭い雑誌になっているのは寧ろ残念である。〉

『世界文化』の人々は、また公式的、機械的な唯物論に対してもあきたらないものをもっていたので、東京の唯物論研究会などとはまたニュアンスのちがうところの、いわば主体性のある唯物論哲学の道をあゆうとしていた。蔵原惟人らの海外理論紹介を摂取しながら、自立的な芸術理論の確立も彼らの希望であった。これらのことは新村猛・真下信一の論調にもうかがえるが、栗本勤（ペンネーム→雉本浩）のフランツ・ボルケナウ『近代世界観成立史（上巻）』書評にある一節をひいて、その例証としよう。

〈この様な時代の複雑混沌たる思想葛藤の中からそのイデオロギーの諸相を具さに究明して、未だ胎動の中にある市民的世界観の本質を認識する事は客易な仕事ではない。然るにボルケナウが能々此の課題を果して得たのはその優れた方法論に依ってである。……（中略）……誠に思想に対する社会的関係（階級分裂）の外的制約を示すだけで、多くは唯物論史観公式の機械的適用に止ったイデオロギー史の多い中に、此程迄に勝れて、思想発展をその内的必然性と外的制約の統一に於て把握し、生きた階級抗争の中に解明し得たものを私は知らない。〉（第一七号、昭和一一年五月）

山田宗睦もこの栗本の文章を引用して『世界文化』を紹介していたが[8]、反ファシズム文化運動のすぐれた所産である『世界文化』の人々が「明敏で良心的であったがゆえに、精緻に持続的に開拓すべき論点をおきざりしても、反ファシズムの運動的思想活動にウェイトをおかざるをえなかった事情、それをうみだした諸条件を、もうひとまわり大きな思想問題」として考えなくてはならないという山田の指摘は妥当であると思う。だが、筆者にとって、山田のつぎのような発言はより痛切なひびきをもって迫ってくる。

〈中井正一の遺構、三木清の悲願、加藤正の執念をかけた理論的研鑽が革命的運動によって疎外されない条件は、思想的にどのようにととのえられるのか。武谷三男は、『世界文化』いらいの三段階論・技術論を、一方ではファシズムによる実

践の神秘化と、他方では日本コミュニズムのセクト的なもう一つの実践の神秘化に抗して、追究したと語ったことがある。このような悲しむべき状況は、現在といえども昔語りとしてすまされないものとして、なお残ってはいないか。

これらの山田の提言をうけとめながら、なお『世界文化』の研究はつづられなくてはならない。つぎにはどうしても、『世界文化』の構成員一人一人の思惟構造、理論構造が時代との連関において、それぞれ追跡されなくてはならない。そうした作業を通して、一九三〇年代における『世界文化』の思想史上、文化史上の位置が明確になってゆくと思われる。

（4）

一九三三年（昭和八）一月、A・ヒットラーによるファシズム独裁政権がドイツに樹立され、世界の平和と民主的自由がおびやかされるにおよんで、これとたたかうために、労働者・農民・都市ブルジョア・インテリゲンチャなどの参加する人民各層による広い統一戦線が、フランスその他の国々において結成されるに至った。一九三五年（昭和一〇）七月から八月にかけてひらかれたコミンテルン第七回大会は、全世界の平和と民主主義を愛する人々に、即時統一戦線を結成することを呼びかけた。大会の主報告者ゲオルギー・ディミトロフは、「ファシズムは勤労人民大衆にたいする資本のもっともどう猛な攻撃である。ファシズムは無制限な排外主義であり侵略戦争である。ファシズムは狂暴な反動であり反革命である。ファシズムは労働者階級と全勤労人民のもっとも凶悪な敵である」（『反ファシズム統一戦線』国民文庫版）と述べている。まさしく、あれくるうファシズムと戦争にうちかつためには、プロレタリアートの統一戦線の基礎の上に、広い反ファシズム人民戦線をうちたてることによるしかないのである。このコミンテルンの呼びかけにこたえ、一九三六年、フランスとスペインにおいては人民戦線が成立し、人民戦線内閣ができあがった。前年に結成された中国の抗日統一戦線も、その一環をなしていたのである。

一九三五年一一月八日に創刊されたフランスの週間新聞『金曜日』（ヴァンドルディ）は、フランス人民戦線の週刊新聞であり、シャンソン・ゲエノ及びアンドレ・ヴィオリスが主幹であった。シャンソン・ゲエノは『金曜日』についてつぎのように述べている。[9]

〈作家が創刊し、作家が指導する『金曜日』は此の国の自由な人々の機関、世界の自由の反響となるであろう。『金曜日』は此の目的で作られた。『金曜日』は自己の占めるべき場所を見出すだろうから此の目的を離れては、存在理由を持ち得ない。……（中略）……此の多様性がすでに吾々の力の一つであり、若し人類のあらゆる企てを助けるために簡単な形式が必要ならば、吾々のは「アンドレ・ジッドからジャック・マリタンまで」と言えよう。〉

〈生活を勤労の上に築き、先ず人間の尊厳を信じる人々。その国を愛する人々、抽象的にではなく、国の真実の名誉、現実の姿である所の、苦しみ創造する生きた人間の内に国を愛する人々。国家や社会は、最も弱い子供をむさぼり食い冷血の怪物であるべきではなくて、仕事を完成し、生活の幸福、情操の向上、精神の明晰に対して権利を持つ人々の友愛的支持であるべきだと信ずる人々。これらの人全部が吾々の読者である。〉

『金曜日』は創刊後一月にして飛躍的に発展し、一〇万もの読者を獲得している。記事は、社説・政治・社会・海外情報・文学・芸術・娯楽・婦人などにわかれ、一二ページであった。この『金曜日』の創刊が『世界文化』に紹介されたのは第一七号（昭和一一年五月）であり、能勢克男もこの頃には『世界文化』の会合に出席するようになっていた。能勢は仙台の出身であり、一九一九年（大正八）七月東京大学法学部法律学科を卒業し、一九二二年四月同志社大学法学部講師から二四年四月教授となったが、二九年（昭和四）四月学内における意見の対立から同志社大学を辞職した。辞職後、能勢は弁護士開業のかたわら、京都家庭消費組合の発起人となり、その運動に従事するようになった。能勢は理事長となり、理事の一人に中井正一がいたのである。組合員には須田国太郎・波多野精一・西田幾多郎・田辺元などもいた。『世界文化』第一三号―第一

五号にのった中井の「委員会の論理」なども、京都家庭消費組合の運動の具体的実践が中井の原体験となり、それを媒介として生み出されたものであろう。『世界文化』に『金曜日』の「創刊より今日まで」が紹介された頃、能勢・中井・久野・新村などの間では、『金曜日』にならった人民戦線的大衆新聞を出したい計画が話に出ていたのである。この計画が実現し、『土曜日』として刊行される経過については、斎藤雷太郎と『京都スタヂオ通信』から出発してゆかなくてはならないのである。

斎藤雷太郎は一九〇三年（明治三六）一〇月一八日横浜市に生まれた。家が貧乏だった関係上、早くから家をはなれて東京に出、苦労の末、新派の俳優井伊容峰の弟子となった。彼が京都に来て松竹下加茂撮影所の演技者となったのは、一九三一年（昭和六）であった。三五年六月頃から彼は、独力で『京都スタヂオ通信』を月一回発行ではじめた。それは下級映画従業員むきの文化新聞であったが、スターのうわさ話程度のものが中心で、従業員の苦労とか、その声をのせる記事は少かった。すでにして斎藤は非合法時代における活動家たちの動きを知っていたので、そのような形式の『スタヂオ通信』にはあきたらず、一般民衆の知識、教養を高めるようなもの、具体的に言うならば、『セルパン』をもっと大衆化したような新聞発行をのぞむようになった。紙面で時事問題をあつかうためには、当時五〇〇円の保証金が必要であった。下加茂撮影所企画部にいた加納竜一（ペンネームは香野雄吉）などに相談もし、斎藤はその金額をつくることに決心した。当時月給五〇円の斎藤にとって、それは非常に困難なことであったが、斎藤は努力ののちにそれを果した。それた一九三六年（昭和一一）春のことであり、『京都スタヂオ通信』は毎月一〇〇〇部印刷し、定価は一部五銭であった。『文芸春秋』の執筆者名簿から住谷悦治を知った斎藤は、住谷をたずね、住谷を媒介として能勢克男を知ったのである。能勢を知ってから『京都スタヂオ通信』の執筆者は放射状にひろがっていった。

司法省刑事局『思想研究資料』（特集第七七号）は、『京都スタヂオ通信』が『土曜日』に解題する過程を、つぎのように

解説している。

〈併し昭和十一年四、五月頃には読者減少し、経営困難となったので斎藤は能勢に援助方を懇請した。然るに同年五月発行の「世界文化」の情報欄に新村猛がフランス人民戦線派の大衆啓蒙文化新聞「ヴァンドルディ」（金曜日）に関する記事を執筆し又其頃の「美批評研究会」席上でも詳細その内容を会員に報告した為、会員中井正一、能勢克男等は之に刺戟され、新村及林要等とも相談の上「金曜日」に模倣した文化新聞を発行し、大衆啓蒙に再出することになったのであるが、恰度右の「スタヂオ通信」が経営困難に陥って居るので此の際陣容を樹直し右三名等が中心となってスタヂオ関係のみの限られた範囲を目標とせず、広く一般知識人、文化人、大衆を目標とし一般文化啓蒙的な新聞として発展せしめんとしたのである。即ち直接には「金曜日」に刺戟され、間接には二・二六事件により、軍部独裁政府の樹立が迫りつつあるものとして之を阻止する為大衆啓蒙に踏出すべくなされたもので、恰度其処に「スタヂオ通信」と云う既存の新聞があったので之を利用した訳である。……（中略）……斯くて昭和十一年六月初より準備を進め同月中旬京都朝日会館に同人等が中心となって此の運動を支持するものと認めらるる左翼的知識人十数名を招待して其意図を発表し協力を求め愈々同年七月五日（四日である↓平林）「京都スタヂオ通信」を改題し「土曜日」として創刊号を発行、翌十二年十一月五日の三十三号（通巻四十四号）迄続けた。〉（一三七ページ・傍線↓平林）

右の文章において、『京都スタヂオ通信』が一九三六年春頃には経営困難におちいったように書かれているが、その頃に五〇〇円の保証金を斎藤がおさめていることから、経営困難という言葉はあたらないと思う。ただ紙面の内容に疲れが見えたということは考えられ、原稿について中井や能勢たちの協力を得なければならなかったということはあったと思われる。さらに傍線で示したように「ヴァンドルディ」（金曜日）に関する記事を新村猛が執筆したとあるが、これは事実に反している。紹介執筆したのは市村恵吾（ペンネーム↓村岡）である。『世界文化』の研究会で新村が主導的であり、「ヴァンドルデ

ィ」について語っていたとしても、執筆はしていないのである。

ともかく、一九三六年七月四日から『京都スタヂオ通信』は『土曜日』と改題、発行されたのである。編集は能勢克男と林要の両名（第二二号・昭和一一年一二月五日からは林がぬけて能勢一人となる）、編集印刷兼発行人は斎藤雷太郎であった。表紙は洗練されて心あたたまるものであり、フランスの作家アンリ、バルビュスが主宰した文化雑誌『モンド』を模倣したものであった。中央部には洋画家伊谷賢蔵の木版画、上部に「土曜日」と大文字ゴジックであらわし、その上下に標語をもってきている。上には、

「生活に対する勇気」
「精神の明晰」
「隔てなき友愛」

があり、下には、

「憩ひと想ひの午後」

と記されていた。

表紙絵の下には毎号異った標語をかかげ、これに対応する内容の「巻頭言」を載せていた。タブロイド型六ページ、一部三銭であった。

第二面「文化」欄。
第三面「映画」欄。
第四面「婦人」欄。
第五面「社会」欄。

第六面「くらぶ」欄（「娯楽」欄としたことがある）。

表紙の「巻頭言」は中井正一と能勢克男の分担によるが、中井執筆のものと能勢執筆のものとにわけるとつぎのようになる。[10]

（昭和一一年）

7／4　花は鉄路の盛土の上にも咲く（中井）

7／17　生きて此処に居ることを手離すまい（中井）

8／1　星を越えて、人間の秩序は、その深さをえ加る（中井）

8／15　虚しいという感じだけに立止るまい（中井）

9／5　どんな小さな土の一塊でもよい、掌に取って砕こう（中井）

9／19　ポーズに気付いた瞬間に行動は空虚になる（中井）

（十八号未見）

10／20　集団は新たな言葉の姿を求めている（中井）

11／5　人間の最後の勝利への信頼が必要である（中井）

11／20　秩序が万人のものとなる闘い、それが人間である（中井）

12／5　真理は見ることよりも、支えることを求めている（中井）

12／19　人間を見くびること、それが一番軽蔑に値する（能勢）

（昭和一二年）

1／5　正月の気分は遠い追憶に似ている（中井）
1／20　我々の市民権の根底には明るいものがある（能勢）
（二六号未見）
2／20　生きた人間が人造人間に敗けてはならない（能勢）
3／5　野にすみれが自由に咲く時である（中井）
3／20　手を挙げよう、どんな小さな手でもいい（中井）
4／5　人間は人間を馬鹿にしてはならない（中井）
4／20　政治は民衆の合理力の上に立ってる（能勢）
5／5　学校は生きて、社会の中にある（能勢）
（三三号未見）
6／5　ユートピァは現実と努力の上にこそ（能勢）
6／20　社会主義を脱け殻にするな（中井）
7／5　誤りをふみしめて「土曜日」は一年を歩んで来た（中井）
7／20　平凡な人間の声、人民の声の中に、真実はある（中井）
8／5　いよいよ健康な道義性をもって時局を担おう（能勢）
8／20　大気の中にはためく新しい詩の精神がある（能勢）
9／5　文化的使命を忘れて新年の生命はない（中井）
9／20　なげやりな気持が人間を空虚にする（中井）

10／5　爽やかな合理のこころを持ちつづけて（中井）
10／20　誇りは誤りをふみしめるところにのみある（中井）
11／5　民族の心はこの現実の中にのみある（能勢）

この「巻頭言」の標語からもわかるように、『土曜日』をつらぬいている精神は、合理主義・人道主義であると思う。そういうところを基点にして、中国侵略にむかってゆく当時の日本国状に対して批判的であった。『土曜日』は月二回発行で、平均五〇〇〇部印刷し、最高は八〇〇〇部にも達したのであり、斎藤は週刊新聞にしようとしてさらに五〇〇円の保証金準備をした。それは約四〇〇円準備できたところで、斎藤の検挙になってしまったのであるが、『土曜日』が街の庶民に好評であった点を斎藤はつぎの三点としている。

○　抵抗精神
○　編集のまじめさ
○　記事の面白さ

そして斎藤が、中井や能勢たち執筆者にいつも強く要望していたことは、「わかりやすさ」ということであった。なぜなら、斎藤は読者の目標を小学校卒業者と中学卒業者（旧制）の範囲とし、とくに小学校卒業者にも理解してもらいたかったからである。良い内容を平易に書いてもらうために、斎藤はよく能勢たちと論争したのである。いわば斎藤は読者の立場から編集につとめ、大学出身者（旧制）や学者先生の書く文章に註文をつけたのである。筆者はこういう論争があったことが貴重であったと思う。進歩的思想をもった知識人と根性をもった庶民とのぶつかりあいのなかから、一つの文化新聞の記事が生み出されていったということは、貴重な体験であったと思うのである。そしてまた、組織をもつということはあぶないこ

とだったので、『土曜日』はあくまで商業紙として編集会議などは簡単にすませていたようである。

『土曜日』刊行の目的・意図について、端的明解に表現しているのは「編集後記」などの記事である。

〈「土曜日」はなぐ(ママ)さみ半分に出されたものではありません。今の時代には、どんな真理でも大ぜいの人々と一緒に摑んだものでなければ、真理であって、真理でないという考えから出来るだけ大ぜいの人々に話しかけ、話しかけられたいためにもくろまれたのです。けれどもこの発行者の意向は、諸君によって驚ろく程敏感に受けとられて、各方面で実に深い友情に出逢っています。本号を御覧下されば土曜日の読者や執筆者が、どんな層に行わたり、泌みこみつつあるかがおわかりになりませう。〉（第一五号「土曜日・月極読者になって下さい」）

〈未知の方々からの投書が目に見えて多くなったのは、非常に喜ばしい。がそれが例えば詩のような全く文学的なものが多いのは、詩を解せぬ編輯部の難渋するところだ。「土曜日」は憩いのためにあるが、それはどこまでも生活の憩いのためであることをお含み願いたい。……(中略)……映画の記事が多すぎるという批評があったので、出来るだけ割愛した。しかし映画が現代に於てどんな役割を果しているかと考えれば、一頁から多少のはみ出しは止むを得ない。……(中略)……この新聞は読まる凡ての人々のものである。批判することは、すぐに手助けする行動に移ってほしい。凡ての読者が記者にそのままになることはできないものか、これも試みることによって(ママ)試めされることなのである。売ったり買ったりすることから心持だけでもいい離れて見たいものです。〉（第一六号「編集後記」）

ここには鮮かに一般商業誌紙との相違があらわれている。大衆とともに考える文化新聞、そしてまた編集者と読者の相互批判による紙面の向上、それらのことが特色として先ず考えられるのである。

東京でも好評であった『土曜日』は、『唯研ニュース』五二号で新島繁によって紹介されている。東京の唯物論研究会で活躍していた新島は、『土曜日』第二〇号に「『土曜日』の活動に寄せて」という一文を寄稿し、現実の生活に正しい批判の

眼を向けようとしている、日本ではまだ珍しい文化的定期刊行物の誕生を喜びながら、『土曜日』の重要なキイ・ポイントをつぎのように指摘している。

〈けだし前者（多くの大学新聞↓平林）では、編輯者は与え、読者は受取る、というだけの大体に於いて一般の大新聞と同じような編輯方針がとられている様ですが、「土曜日」の方は、むろん今のところまだ小規模ではあるにしても、最近号（一〇・二〇、十九号）の「巻頭言」にも闡明されていたように、「凡ての読者が執筆者」となり「数千の人々の口となる」ことを使命としているのですから、この点にこそ、編輯の上からも読者倍加の上からも、最も重要なキイ・ポイントがあると思われます。〉

新島の指摘は妥当であり、『土曜日』は、すべての読者が執筆者となることで、新しい集団的な言葉を求めていたのであり、人間の新しい秩序への行動を探索していたのであった。

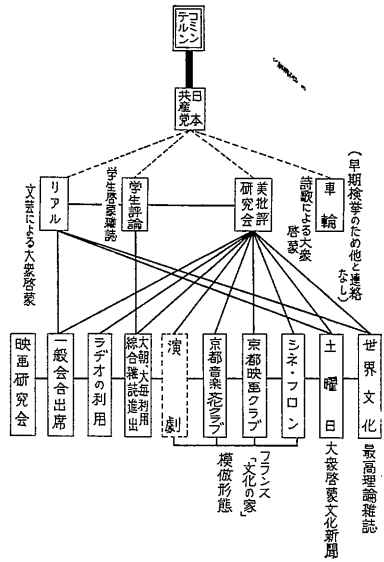
さらに読者層との連関のもとに、記事内容の精密な検討を行わなければならないが、今号においては、『土曜日』についての追及をひと先ずここで打ちきっておく。

（5）

一九三七（昭和一二）年七月七日、日本帝国主義は本格的に中国侵略を開始した。その年の秋も深まろうとしていた一一月八日、『世界文化』の中井正一・新村猛・真下信一、『学生評論』の草野昌彦、『土曜日』の斎藤雷太郎が権力の手によって検挙された。ここにおいて『世界文化』も『土曜日』も発行不可能になった。つづいて久野收・禰津正志・和田洋一・熊沢復六・能勢克男らが検挙されていった。

司法省刑事局『思想研究資料』（特集第七七号）は、京都における人民戦線的文化運動を図解して示している（二五三ペー

図表Ⅱ



ジ）。

図表Ⅱは当時の検察側がまとめたもので、一目瞭然、要領よくまとめられているが、この図解は訂正されるべきものを含んでいる筈である。縦の関係である日本共産党との関係はこのままでよいのか。あるいはまた、横の関係はこのままでよいのか。

当時の記録、また関係者からのききとりなどによって、われわれは歴史の真相に近ずいてゆかなくてはならない。時間と忍耐の必要な作業であるけれども、それを通して昭和一〇年前後における京都の進歩的文化運動の全貌を把握し、自由主義者たちの日本における抵抗の性質・形態をあきらかにしてゆきたいと思う。

(1) 藤田「中井美学の周辺2」（『中井正一全集』の「おりこみ」(2)）。辻部「『世界文化』と『土曜日』のころ」（『思想の科学』一九六三年八月）。
(2) 「『世界文化』のこと」（『文学界』一九六一年一一月）。
(3) 「中井正一と『世界文化』」（『中井正一全集』の「おりこみ」(1)）。
(4) 筑摩叢書15『昭和文学史』九ページ。
(5) 白井健三郎訳（人文書院『サルトル全集(8)』）。
(6) 丸山静「言語と文学」（『文学』一九六六年一月）。
(7) 『灰色のユーモア』四ページ。
(8) 「《日本の思想雑誌》『美、批評』『世界文化』」『思想』一九六三年八月）。
(9) 『金曜日』（ヴァンドルディ）についての記事は、すべて『世界文化』第一七号（紹介者は市村恵吾→ペンネームは「村岡」）による。
(10) これは能勢の証言による。

（付記）

昭和四〇年八月、筆者は栗本勤・禰津正志両氏から有益な教示をうけた。また、昭和四一年一月二三日には、『土曜日』編集発行の責任者であった能勢克男、斎藤雷太郎両氏を囲んで座談会をもち、ここでも貴重な教示をうけた。ここで教示をうけた諸氏に深く感謝申し上げる。なお、『土曜日』の座談会にC・S側から出席したのは、住谷悦治・篠田一人・和田洋一・杉井六郎・平林一・郡定也・長野和子である。